

文化

情況に立ち向かうため

始動・合意してない プロジェクト

阿部 小涼

それは十月三十日、映画『Marines Go Home』を見て雨の県民総決起大会に参加した後のこと。

それぞれに憤懣やる方ない思いを抱いて集まった私たちは血気盛ん意気軒昂。鼻息も荒く誰かが言い出し、日米政府による暴力的「合意」を拒否するため、

米国防総省での共同記者会見を終え、握手を交わす町村外相(左)とラムズフェルド米国防長官。右は大野防衛庁長官(日本側の肩書は当時)＝10月29日(A.P.＝共同)



りつつも、どこか醒めたアタマで、何が可能なのか、それを企むために私たちが集まっていた。まだ名前もないその企画は、このようにして誕生した。

想像力でつながる

コンセプトは次のようなものだ。①今、可能なゼネスト。あるいはゼネストに向かうための思考を鍛える場を②完成された企画でなくともよい、まず第一弾という気楽さ③非系統的、非

クト。旗揚げ、といっても掲げるべき旗もない。「委員会」でも「組織」でもなく、まずは、日米の暴力的「合意」を否定し批判するため、いろんな場所で、いろんな方法でアクションを起こす。それぞれが自分のできるプロジェクトを持ち寄って創る。私たちを表す名前さえ「誰もが見解の一致に至っているワケではない」のダブルミーニングを込めるといふ皮肉ぶり。あ

学、社会学、言語学、歴史学、文系に傾斜しつつも多様な分野を担う人々。確かなことは、あのヘリ墜落の体験から連携した研究者が、その延長線上のアクションと捉えて集まっていることぐらいだろう。

授業を市民に公開

アクションの命名に加え、私たちはまず次の二点をアピールすることにした。①県知事と名護市長は、基地県内移設に反対する地

豊光、高嶺剛特集とトークなど、連日のイベントを実施する予定だ。また、それと重なり合う十一月下旬から十一月月上旬には、十二月三日のシンポジウムのほか、想像力を掻き回すような企画が随時加わっていく予定(何しろプロジェクトを持ち寄ってくれる仲間次第なので不確定要因が大きいのも、このアクションの特徴である)。

方面からの知を平和の学として結び合わせる試みとなることを期待したい。そして、伊江島闘争で理念化された非暴力直接行動を想起しよう。伊佐浜闘争を支えた高校生、琉大事件で除籍処分を受けた大学生、金武湾闘争、軍隊による人間性の抑圧に抗する女性たちの闘い、これら抵抗者の名を呼び戻そう。過去の闘争をリスペクトし、現在につなごう。

大学の開放、教員の解放

抵抗運動「再創造」を

普天間移設

国家暴力に抗し公開講座

中心的、非組織的な実践を、抵抗運動の再創造に④想像力で、つながる。政治的意識の高まりは、見えにくいかもしれないけれども

テイストに、なるべく沢山の人が参加してもらえないかと期待も込めた。緩やかに広がるネットワークで、現在までに五十名ほどがメールで連絡を取り合っ

元として県民の圧倒的多数の声を十分に汲み、政策に反映するよう強く求める。今回の僧侶不当逮捕に抗議し、即時釈放を要求する。さて私たちのアクションの概要は以下の通り。十一月二十三日から三十日まで

しながら、自分の授業の一角を公開する、「自由！開放！」大学企画が計画されている。国家の暴力的立法を超越し平和と正義の法を求める市民意識の涵養、これからの沖縄が目指すべき自治制度の模索、

に、まずは、小さく囁くことから始めてもいいと、私は思う。「合意？ 聞いてないよ」「そろそろゼネスト？」「()はひとつ島

充満している。それが政治的アクションにつながっていく、そのような新しい運動のかたちを模索しよう、その点での合意を頼りに動いてみようと考えた。

十一月九日、ようやくこの集合体に名前が与えられた。合意してないプロジェ

琉大その他内外の大学研究者、学部学生と大学院生、会社員、フリー編集者、フリーター、芸術家、学芸員、などなど。専門分野は文学、思想、政治学、法

指すべき自治制度の模索、基地誘致につきまとう開発と資本主義に対抗する倫理、抵抗運動を想像・再創造する文化政治。普段は孤立しがちな研究者同士が相互に専門領域を横断し、多

情況に立ち向かうために、まずは、小さく囁くことから始めてもいいと、私は思う。「合意？ 聞いてないよ」「そろそろゼネスト？」「()はひとつ島

た。合意してないプロジェ

文学、思想、政治学、法

ニシアターで森口聡、比嘉

相互に専門領域を横断し、多

「()はひとつ島

に何がでるのだから

が県民投票・県民大
める性急な心を抑え
、ゼネストや島ぐる
の過去に憧憬を抱
国主義に向かう憲法
あるなら沖繩を「憲
特区」にしよつ、こ
住所は反国家地区二
」などと盛り上げ

りつても、どこか醒めたア
タマで、何が可能なのか、
それを企むために私たちは
集まっていた。まだ名前も
ないその企画は、このよう
にして誕生した。

想像力でつながる

コンセプトは次のような
ものだ。①今、可能なゼネ
スト。あるいはゼネストに
向かうための思考を鍛える
場を②完成された企画でな
くてもよい、まず第一弾と
いう気楽さ③非系統的、非

クト。旗揚げ、といつても
掲げるべき旗もない。「委
員会」でも「組織」でもな
く、まずは、日米の暴力的
「合意」を否定し批判する
ため、いろんな場所、い
ろんな方法でアクションを
起す。それぞれが自分に
できるプロジェクトを持ち
寄って創る。私たちを表す

学、社会学、言語学、歴史
学、文系に傾斜しつつも多
様な分野を担う人々。確か
なことは、あのへり墜落の
体験から連携した研究者
が、その延長線上のアクシ
ョンと捉えて集まっている
ことくらいだろう。

授業を市民に公開

名前さえ「誰もが見解の一
致に至っているわけではな
い」のダブルミーニングを
込めるといふ皮肉ぶり。あ
るいは、ちょっと情けない

アクションの命名に加え
て、私たちはまず次の二点
をアピールすることにし
た。①真知事と名護市長は、
基地県内移設に反対する地

豊光、高嶺剛特集とトーク
など、連日のイベントを美
施する予定だ。また、それ
と重なり合う十一月下旬か
ら十二月上旬には、十二月
三日のシンポジウムのほ
か、想像力を掻き回すよう
な企てが随時加わっていく
予定(何しろプロジェクト
を持ち寄ってくれる仲間次
第なので不確定要因が大き
いのも、このアクションの
特徴である)。

方面からの知を平和の学と
して結び合わせる試みとな
ることを期待したい。
そして、伊江島闘争で理
念化された非暴力直接行動
を想起しよう。伊佐浜闘争
を支えた高校生、琉大事件
で除籍処分を受けた大学
生、金武湾闘争、軍隊によ
る人間性の抑圧に抗する女
たちの闘い、これら抵抗者
の名を呼び戻そう。過去の
闘争をリスペクトし、現在
につなごう。

大学の開放、教員の解放

ニューヨークのハレム
にある小さな書店「リベ
ーション・ブックスストア」
は、アフリカ系たちの抵抗
運動の支柱となる知を町の
人々に知らせる場だった。
その看板には次のように記
されている。「知らない者
は学べ。知る者は教え
よ」。授業を公開し、知を
シェアし、大学を開放する
ことは、何よりもまず、私
たち大学教員の解放でもあ
ると信じている。

てみよう、そこに魂が宿る
はずだから。そうしたら次
はあなたが、大好きなあの
人や、遠くの人へも言
葉を届けよう。「合意して
ない」と。
(あべ・こすず 琉球大
学助教)

設 移 間 天 普

抵抗運動「再創造」を

国家暴力に抗し公開講座

中心的、非組織的な実践
を、抵抗運動の再創造に④
想像力で、つながる。政治
的意識の高まりは、見えに
くいかもしれないけれども
充滿している。それが政治
的アクションにつながって
いく、そのような新しい運
動のかたちを模索しよう、
その点での合意を頼りに動
いてみようと考えた。

テイストに、なるべく沢山
の人が参加してもらえない
かと期待も込めた。

元として県民の圧倒的多数
の声を十分に汲み、政策に
反映するよう強く求める②
今回の僧侶不当逮捕に抗議
し、即時釈放を要求する。

しながら、自分の授業の一
コマを公開する、「自由！
開放！ 大学企画」が計
画されている。国家の暴力
的立法を超克し平和と正義
の法を求める市民意識の
涵養、これからの沖繩が目
指すべき自治制度の模索、
基地誘致につきまとう開発
と資本主義に対抗する倫
理、抵抗運動を想像・再創
造する文化政治。普段は孤
立しがちな研究者同士が相
互に専門領域を横断し、多

十一月九日、よつやくこ
の集合体に名前が与えられ
た。合意してないプロジェ

琉大その他内外の大学研究
者、学部学生と大学院生、
会社員、フリー編集者、フ
リーター、芸術家、学芸
員、などなど。専門分野は
文学、思想、政治学、法

合って計画を進めている。
沖繩大・沖国大・キリ学・
琉大その他内外の大学研究
者、学部学生と大学院生、
会社員、フリー編集者、フ
リーター、芸術家、学芸
員、などなど。専門分野は
文学、思想、政治学、法

状況に立ち向かうため
に、まずは、小さく囁く
ことから始めてもいいと、
私は思う。「合意? 聞い
てないよ」「そもそもゼネ
スト?」「こはひとつ島
ぐるみで」。まず言葉にし

合意してないプロジェ

文学、思想、政治学、法

互に専門領域を横断し、多

互に専門領域を横断し、多

互に専門領域を横断し、多

互に専門領域を横断し、多

互に専門領域を横断し、多

互に専門領域を横断し、多

互に専門領域を横断し、多

互に専門領域を横断し、多

互に専門領域を横断し、多